令和７年４月 26 日

令和６年度函館支部活動報告

１　研究構造について

＜函館支部　研究主題＞

運動に魅力を感じ，自ら学び，高め合う体育活動の創造
～豊かなスポーツライフの実現を目指した授業づくりの実践を通して～

＜目指す子ども像＞

「かかわり合いの中で主体的，協働的に運動に取り組む子」
自ら課題をもって解決する子　仲間と創意工夫しながら学び合う子　運動に夢中で取り組み，挑戦し続ける子

＜研究の視点＞

①場やルールを選択したり，決定したりする学習場面の設定

②学びを実感し，次の学びにつなげる振り返りと適切な評価場面の設定

＜今年度の重点活動＞

①体育授業の実践（会員一人一実践）　②小中連携の推進　③渡島及び北海道体育連盟との交流

２　授業実践報告

□公開授業①　第２学年　E ゲーム　イ 鬼遊び　「宝をゲット！～めざせ，トレジャーハンター～」
授業者　北海道教育大学附属函館小学校　教諭　住吉　太一

□公開授業②　第６学年　B 器械運動　ア マット運動　「マット運動競技会」
授業者　北海道教育大学附属函館小学校　教諭　石崎　寿和

□公開授業③　第４学年　E ゲーム　ア ゴール型ゲーム　「グリッドサッカー」
授業者　函館市立神山小学校　教諭　渡邉　丈也

□公開授業④　第５学年　E ボール運動　ア ゴール型　「サッカー」
授業者　函館市立神山小学校　教諭　大須賀　遼

研究の視点を踏まえて，授業づくりを行い，４つの研究授業を公開することができた。その実践から見えてきた成果と課題については，次のとおりである。

（１）成果

・場やルールの選択においては，児童と場やルール（規則）を共につくったり，教師が意図的に場やルール（規則）を設定したりすることで，学年や実態に応じての目標達成を図ることができた。
・場については，場を広げたり，制限を緩和させたりすることで，運動の幅の広がりにつながった。
・鬼遊びの授業においては，児童がもっている「今ある力」で楽しめようにゲームの構造を段階的に高度化することで発展性のあるゲームを行うことができた。
・動画を撮影し，よい動きを授業の始めに全員で振り返ることにより，本時の目指す姿やめあてにつながる学びの連続性を意識した授業を行うことができた。
・ＩＣＴの活用（ロイロノート，Google スライドなど）により，

写真１　場やルールを共有する場面

写真２　よい動きを共有する場面

一人一人の振り返りがポートフォリオとして蓄積でき，常に自分の学びを振り返ることができた。振り返りでアンケート機能を活用することは，次時への意欲化や次時の見通しをもてる等，効果的なツールであったと考える。

（２）課題

写真３　動きのこつの掲示

・教師の関わりについて，評価する場面，支援する場面と，常に意識して児童へ声をかけていく必要がある。その規準として，指導案で示した「評価規準」を大切に指導にあたるとよい。児童の良い動きや建設的な発言を具体的に教師が評価をする必要がある。
・個人やチームで振り返りの視点を与えることで，次の学びにつながる。教師は常に児童が行った振り返りを把握し，全体で共有していくことが大切である。
・作戦タイムの時の教師の関わりで，教師が意図的にチームの話し合いに入ったり，よりよい方法をアドバイスしたりして，各チームの作戦を把握した上で，ゲーム内の動きを評価しなければならない。

（３）次年度に向けて

・児童が夢中になって主体的に運動に親しむ環境整備を設定することが大切であるため，今後も発達の段階に合わせて学習場面の設定していくことを視点として入れていきたい。
・低学年の鬼遊びから中学年のゲーム，中学年のゲームから高学年のボール運動へとつなげていくための，カリキュラムの構築を次年度も行っていく。
・教師が何を評価するのかを明確にしながら，授業を行う必要があるため，教師同士の授業を見る視点も，研究部として提案していきたい。
・今年度の実践で見えてきた課題をもとに，視点①，視点②を中心に「主体的・対話的で深い学び」の実践を積み重ねていきたい。
・２つ実践からカリキュラムを意識する必要性を見出すことができたため，今後は小中で授業を見合ったり，意見を交流したりするなど，小中連携の推進が一層重要であると考える。
・札幌で行われる全国研究大会に積極的に参加し，会員に還流していくことで，学校体育研究の方向性を学び函館支部の研究をより充実したものにしていきたい。